

知られざる  
三重にまつわる  
文学・美術を  
紹介します。



『月瀬記勝』、『拙堂文集』(筆者蔵)、『拙堂文話』(三重大学附属図書館蔵)

CHRONICLE OF MIE  
VOL. 9

【文学編】

吉丸雄哉 よしまるかつや  
人文学部・文化学科准教授  
専門は日本近世文学

**藩校有造館 督学、齋藤拙堂。**

文章四大家の一人として  
全国に名を轟かせた才人。  
詩作も優れる。  
藩校有造館の拡充発展に尽力したほか、  
先進的な献策を行った。

**齋** 藤拙堂は全国にその人ありと知られ、各地より面会を求める客のあまたあった傑物である。津藩藩校有造館督学として文武の両面において、育英に努めた。また、広く書を購入し藩校の蔵書の充実に努めたほか、中国史書の大著『資治通鑑』をはじめ、藩による出版事業に力を注いだ。さらに、洋学や当時先端のワクチン療法である種痘など、新知識を採用し実施した。儒学者として深い知識を有していたのはもちろんであるが、藩校では武術も奨励し、藩士には洋学・兵法・砲術など実学も積極的に学ばせた。国防へも目を注ぎ、諸外国の足音が太平の世に近づく時代、未来を見すえて、現実の社会問題に取り組んだ。安政2年(1855)に幕府に招かれたが固辞して津藩で生涯を終えた。

多方面にその才能を発揮した巨人であり、そのすべての才能・事績はこれからの僅かな紙面では語り尽くせない。よって、今回はそのうち文章家、詩人の面を紹介する。

拙堂は江戸の津藩邸に生まれ、幕府の学問所である昌平黉に学んだ。寛政三博士の一人である古賀精里に学び、終生師と仰いだ。古賀精里も詩文に優れた人物で、門下に草場佩川、篠崎小竹、野田笛浦など優秀な人材を多々輩出した。精里門下の拙堂・小竹・笛浦に坂井虎山を加えて、文章四大家として知られるようになった。

拙堂の文章は、江戸後期から明治にかけて広く愛された。その代表が拙堂の『月瀬記勝』である。頼山陽の『耶馬溪図巻記』とともに、景勝地を叙景した名文の双絶として、人々に親しまれてきた。月瀬は名張川の溪谷にあり、梅林の名所であった。文政13年(1830)に拙堂は梁川星巖夫妻らと月瀬を訪れ、その直後に自然美を賞した詩文を残した。詩文は山陽の添削を経て、嘉永4年(1851)に刊行され、以後人々に愛読された。残念ながら、



齋藤拙堂 さいとうせつどう

儒学者

1797年～1865年

寛政九年(1797)生、慶応元年(1865)没。諱は正謙、字は有終。江戸の津藩邸生。昌平黉に学ぶ。二十四歳で津に移り、以後、津藩のために生涯尽力する。

拙堂が賞美した梅林は昭和44年(1969)に高山ダムの下になってしまったが、付近に新たな梅林が育成されている。

拙堂の著述でほかに有名なのは、天保元年(1830)に正編、天保7年(1836)に続編の上梓された『拙堂文話』である。漢文の作法や古来の文章家への鋭い考察を記す。江戸時代に出版された漢文論のうち、質量ともに最大級といって間違いない。拙堂の文章を手軽に楽しむものとして『拙堂文集』が明治14年(1881)に編まれた。序跋や墓誌や伝記といった拙堂のものした文章を広く集めている。その様式は明治の「文集」ブームの模範となった。

拙堂は生涯詩作に励み、現在までに約1,200首の漢詩が確認されている。だが、生前に詩集を公刊することはなく、書写した詩集を詩友に送って品評を求めるだけだった。篠崎小竹・藤森弘庵・広瀬旭莊らの評が残るが、いずれも拙堂の詩才・文才に賛嘆している。江戸期のいくつかの選集が拙堂の詩を収めたほか、明治になって紀行を中心とした詩文集が刊行されたが、それ以外に拙堂の詩を知るすべはなかった。

近年になり、杉野茂編『齋藤拙堂詩選』(三重県良書出版会、1989)が220首を紹介し、その後拙堂の玄孫、齋藤正和氏が稿本や刊本から影印を集め、『拙堂詩集』(私家版、1990)に収め、拙堂の詩の概要がわかるようになった。さらに『拙堂詩集』を呉鴻春が校訂・増補して翻刻し、『鐵研齋詩存』(汲古書院、2001)を出版した。これにより現存する拙堂の詩のほぼすべてが現在鑑賞可能である。



【左】月瀬の梅林

【中】津の偕楽公園にある齋藤拙堂の碑

【右】津の四天王寺にある齋藤拙堂の墓

【誌面中央】「池田雲樵筆 齋藤拙堂画像」(齋藤正和氏蔵)